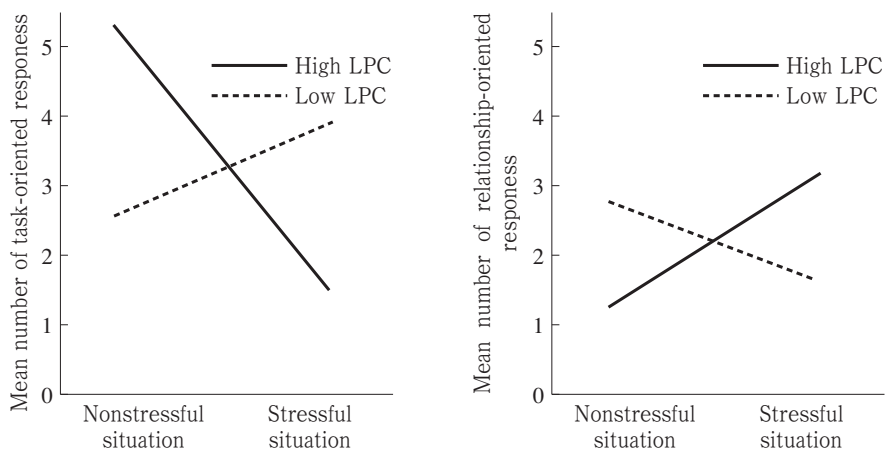


〔研究ノート〕

フィードラーのリーダーシップ理論とわたくし (3)

白 檉 三四郎

〔仮説7〕の検証。この仮説こそ、リーダーシップ効果性の条件即応モデル (contingency model of leadership effectiveness; Fiedler, 1964) の成立の根拠を解き明かすことに関係すると言えます。つまり、リーダー LPC と行動との関係にかかわる仮説なのです。Fiedler & Garcia (1987) はこの仮説を検討するために、2種類のデータを提示しています。うち1つは Sample & Wilson (1965) 実験データをわたくしが再分析して見出した結果 (上掲第3図) です。もうひとつは Larson & Rowland (1973) が高速道路郡管理局の管理者研修で行われたインバスケット訓練場面を用いた実験で見出したデータです (わたくしはオリジナル論文ではなくて、Fiedler & Garcia, 1987 による記述を参照しています)。高ストレス条件において参加者は「この検査は行政能力を測定するためのよい検査であって、その結果は組織の再編成を行うときの資料として用いられる可能性がある」と告げられました。一方低ストレス条件の参加者は「検査者が訓練のための必要時間を知るための予備検査である」と教示されました。インバスケット訓練で各参加者が課題に関連した内容の反応をどの程度示すか、また人間関係に関連した内容の反応をどの程度示すかが測定されました。結果は第11図に示されます。



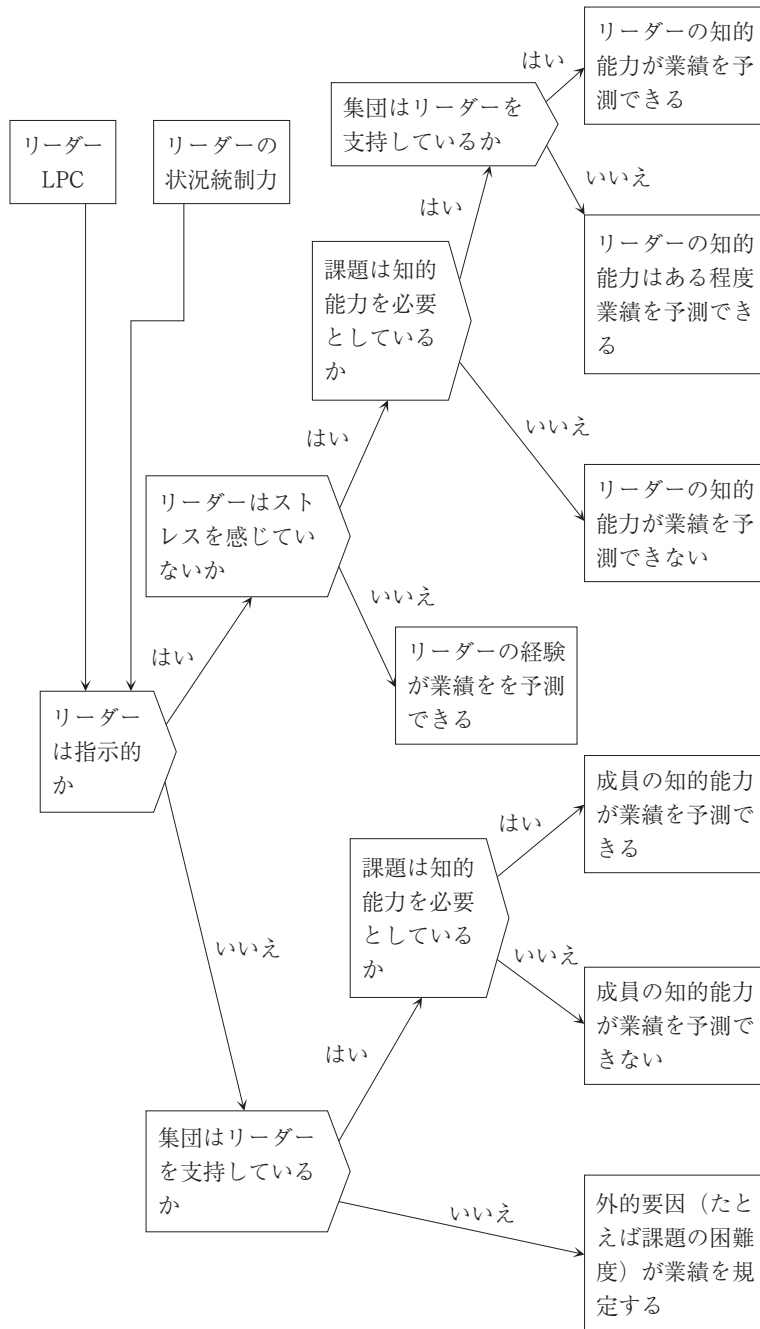
第11図. イン・バスケット実習課題におけるストレス・レベル別にみた高低LPCリーダーの行動の比較 (Larson & Rowland, 1973 実験データ, Fiedler & Garcia, 1987).

この図に示されるとおり、高 LPC の人間は低ストレス条件で課題関連反応を多く示すが、高ストレス条件でこの種の反応は激減します、また高 LPC の人間は低ストレス条件で人間関係志向の行動をあまり示さないが、高ストレス条件でこの種の行動を急増させます、これに対し低 LPC の人間は高 LPC の人間とまるきり反対の行動を示します、すなわち低ストレス条件で課題関連行動をあまり示さないが、ストレスが高まるにつれ急速にこの種の行動を増加させるのに対し、低ストレス条件で人間関係志向の行動をかなり示すが、ストレスが高まるにつれ、この種の行動を急速に減少させる、…という傾向が認められるとしました。つまり第11図と第3図は本質的に同一のことを示唆しているという訳です。言い換えると LPC と状況によって仕事指示性あるいは人間関係推進行動が規定される…と考えられているのです。ただ仮説の文章の記述の仕方がこの他の仮説の場合よりも、やや限定の口調が弱いようにも感じられ、Fiedler & Garcia (1987) もこの仮説に関しては言及の仕方が限定的であるように感じられます。

[仮説1] から [仮説7] までをまとめると第12図のようになります。これをみると、リーダー LPC から業績までの諸要因の働き方がよく理解出来ます。Fiedler (1964) のリーダーシップ効果性の条件即応モデルはリーダー LPC と状況要因とのかかわり方が業績を規定する、ということを中心とした主張でしたが、その途中の過程は一切不明でした。この第12図によって、この全過程が描き出されたこととなります。これだけリーダーシップ過程は複雑なものであるということを改めて認識させてくれる、ということになります。

フィードラー先生から贈られたこの本（いまでは背表紙もはずれかかっていますし、ページもところにより外れそうになっています。それほど何度も繰り返し開いたということでの）の序文に、イリノイ大学心理学部集団効果性研究室（1951～1969）およびシアトルのワシントン大学心理学部組織研究室（1969～1985）のそれぞれの研究室で研究を行ってきた院生や研究者の名前多数が列挙されています。ワシントン大学の項にはわたくしの名前も挙げられていて、たいへんうれしく思いました。この本を通読したとき、驚きはしましたが、Fiedler (1964) を読んだときほどではありませんでした。フィードラー先生の研究はいずれその方向に進むであろう…となんとなしに感じられていたからです。それにしても昔の研究データを再分析し、あらたに実験を行い、このような複雑な理論モデルを構築するとは、そのエネルギーにはまたまた驚嘆させられました。

この認知的資源理論についても、すぐさま激しい批判論文が出ました。ベキオ：Vecchio, 1990）は空軍下士官を実験協力者とする実験室実験で認知的資源理論の妥当性検証実験を行い、上記7個の仮説のうち、仮説2を除いて他はすべて仮説は支持されなかったとし、①フィードラーは知能を単純化して捉えている、近年知能を多重的に捉えるアプローチがとられつつある、②フィードラーはストレスをネガティブにのみ捉えている、ストレスは条件次第で潜在的に動機付けとなり得るという指摘も近年みられる、③課題遂行において知的要請がどの程度存するか、という側面のみならず、これ以外の要因の組み合わせにも留意すべきではないか、など厳しく批判しました。これに対してフィードラー先生のグループ（Fiedler, Murphy, & Franks, 1992）はただちにこれまた激しい口調で反論



第12図. 認知的資源理論における諸変数間の関係モデル (Fiedler & Garcia, 1987).

[出典] Fiedler, F. E., & Garcia, J. E. 1987 *New approaches to effective leadership: Cognitive resources and organizational performance*. New York: John Wiley & Sons.

しました。Dr. Susan Murphy は Dr. Martin M. Chemers のお弟子さん、Dr. Chemers はフィードラー先生のお弟子さんですから、Susan はフィードラー先生の孫弟子に当たります。Dr. Martin M. Chemers には1979年、フィードラー先生の研究室ではじめてお会いして以来、長いお付き合いです。Dr. Chemers の著書、編集書をこれまで翻訳したこともあります (Chemers, 1997; Chemers & Ayman, 1993)。Fiedler et al. (1992) の反論はこれまたものすごいものです。その反論は実に多方面にわたっていますが、たとえば Vecchio の実験における変数操作には多くの誤りが混在しているとか、知能測定において WAIS (Wechsler 成人用知能検査) を推奨するが、われわれはわれわれの研究で用いてきた Horn 尺度の方が望ましい、などなど、ことばは激烈です。リーダーシップ効果性の条件即応モデルに関する論争と同じレベルの論争がここでもまた繰り返されているのです。

1990年5月わたくしは鳴門教育大学から阪大人間科学部社会心理学講座教授に転じました。かつて三隅先生が長年おられたポストです。三隅先生が定年で阪大を退任、私立奈良大学社会学部教授・学部長に就任、助教授濱口恵俊先生が教授に昇格されました。その後濱口先生が京都の国際日本文化研究センターに移動され、阪大・社会心理学講座は教授、助教授とも空席になりました。そこへわたくしが教授として就任することになったのです。この年の夏、京都の国際会議場で、国際応用心理学会が開催されました。この学会の招致、開催に関しては三隅先生が並々ならぬ努力を傾注され、実現に至ったのです。

国際応用心理学会本会議開催前の2日間、京大・楽友会館でワークショップが開催され、いくつものシンポジウムがもたれました。そのひとつに、Judith Komaki 企画・司会「リーダーシップ研究最前線」(パネリスト Fred E. Fiedler, 白樫三四郎, George Graen, 若林満) が組まれました。Dr. Graen については上でフィードラーのリーダーシップ効果性の条件即応モデルに関してきびしい批判を行い、フィードラー先生自身これに強く反駁された経過があることについてふれています。さてこのシンポジウム、前半は5人のスピーカー(司会者を含めて)が各自の研究報告を行い、休憩時間に入りました。フィードラー先生はわたくしに部屋をもうひとつ準備するよう事務局と交渉することを要請されました。さて休憩後、フィードラー先生は司会者の Dr. Komaki を差し置いて自ら登壇「皆さん、白樫やわたくしの話をもっと聞きたい人はこの部屋に残ってください。Graen や若林と議論したい人は〇〇室にただちに移動してください。Komaki の話を聞きたい人はこの部屋のあちらの隅に移ってください」と言って、聴衆を3つのグループに分けてしまいました。聴衆はフィードラー先生のこの指示に従い、相互に別れていきました。シンポジウム終了予定時刻に流れ解散です。こんなシンポジウムも始めてです。フィードラー先生は1970年代の Dr. Graen 他との論争が忘れられなかったし、いままた同じ席で論争となるのを避けたかったのです。この京都における国際応用心理学会会議場で、ばったり Dr. Dian Hosking と出会いました。お互い名札をつけていたのでわかりました。彼女はわたくしに「まだフィードラーやっているのですか。もうやめてこちらにいらっしやい(われわれの研究グループの研究に参加してくださいよ)」と言っていました。

1994年夏、スペインのマドリッドで国際応用心理学会が開催されました。フィードラ先

生は組織心理学部会長として、講演をなさいました。テーマはもちろん「認知的資源理論」。この講演についても上で簡単にふれています。フィードラー先生は1990～1994年、組織心理学部会長を務められました。フィードラー先生はわたくしに組織心理学部副会長もしくは会計担当の選挙に立候補するようおすすめになりましたが、ありがたく感謝しながら結局お断りしてしまいました。マドリードの会議における講演原稿が国際応用心理学会機関誌に掲載され、これが1995年度の優秀論文2編のうちの1編に選ばれたことも上に述べたとおりです。

1998年夏、サンフランシスコで国際応用心理学会が開催されました。この会議でフィードラー先生は組織心理学部会プログラム委員会委員長に就任されました。フィードラー先生はわたくしに招待シンポジウムを企画・司会するよう推薦してくださいました。

企画・司会：白樫三四郎（日本，大阪大学）

テーマ：東アジアの国々における組織心理学の方向と展望

発題①Uichol Kim（韓国，チュン・ヤン大学）「成功と失敗の帰属：韓国の政府職員と企業職員について韓国固有の視点からの分析」

②Zhon-Ming Wan（中国，杭州大学）「中国における組織心理学の現状と見通し」

③白樫三四郎「日本における組織心理学の方向と展望」

指定討論：Martin M. Chemers（アメリカ，カリフォルニア大学サンタクルーズ校）

上記のような内容で、無事なんとか時間内にシンポジウムを運営することが出来ました。サンフランシスコの国際応用心理学会終了後、家内とともになつかしのシアトルを訪ねました。フィードラー先生は1985年にはすでにワシントン大学を退職され、かつてフィードラー先生の組織研究室が入っていた Johnson Annex A の、あの木造平屋建ては完全に撤去され、周囲も整備され、跡に大きな新しいビルが建てられていました。「夏草や兵どもが夢の跡」（芭蕉）このときフィードラー先生ご夫妻はわたくしどもをシアトル郊外の自然動植物園に案内してくださいました。このとき先生は双眼鏡を取り出して、これを使うように勧められました。その双眼鏡は1979年にわたくしどもがお土産として差し上げたものだったので、そのことを説明し、先生も思い出されました。広大な敷地を“trek”（牛車）と名付ける連結車でゆったりと案内され、動植物のありのままの姿を観察出来ました。公園出口付近で4人で写真をとろうとして、通りがかった見知らぬ人にカメラのシャッターを押すようフィードラー先生は依頼されました。その人は気軽に応じてくれましたが、別れるとき先生は「明日のニューヨーク・タイムスを見てね」（われわれ有名人だからこの写真載っているよ、というまったくのジョーク）と言って先方を驚かせました。

この頃フィードラー先生は「夫婦とも年をとってきたので、とくに夕食など自宅で食事の準備をすることがしだいに困難になってきて、つい外に食事に出ることが多くなる」と言われていました。

Fred E. Fiedlerは1922年7月13日、オーストリアのウィーンで、ユダヤ人の両親の間の一人っ子として生まれています（履歴に関してはFiedler, 1992, Hoojiberg & Choi, 1999を主として参照）。小学校では級友からのいじめに苦しめられています。クラスで背が一番

低かったこと、それとユダヤ人であるということが主たる理由でした。当時ウィーンには精神分析のジムクント・フロイトが診療所を開き、治療、研究、執筆を続けていました。フィードラー少年は難関として知られるギムナジウムの入試に合格し、入学しますが、その成績は惨憺たるもので、やがてフィードラー少年は退学し、別の中学校に転校します。1933年隣国のドイツでヒトラーが政権をとり、ユダヤ人圧迫を強めていきます。フィードラー少年はアメリカへ行きたいと強く望むようになり、インディアナ州の遠い親戚に手紙を書いて受け入れてほしいと強く訴え続けました。フィードラー少年の両親は中国の上海(当時ビザなしで入国出来ました)に行くこととなりますが、インディアナ州の親戚が受け入れを約束してくれたので、フィードラー少年は16歳の誕生日直前に単身アメリカに向かいます。フィードラー先生はいまでも港に集まっていた大勢のナチスの兵隊の軍靴の音、「早く乗船しないとアメリカに行けなくなるぞ」と怒鳴る彼らの声がいっまでも耳に残ると言っておられました。フロイト一家がパリ経由でイギリスへ向かったのとほぼ同じ頃であったと思われます(フロイト一家がウィーンを離れたのは1938年7月3日でした)。

アメリカに到着したフィードラー少年はおよそ1年間インディアナ州・サウスベンドで生活しますが、その家族がフィードラー少年1人を残してインディアナ州を離れてしまいます。フィードラー少年はそれ以来まったく独力で生きていかなければなりません。1940年ハイスクールを卒業します。自動車の運転・修理、ポップコーン売り、その他およそ30種もの仕事を転々としてきました。やがてミシガン電力会社に社員として入社することができ、ようやく落ちついて勉強しようという気持ちになってきました。フィードラー青年は1922年秋、西ミシガン教育大学(現在の西ミシガン大学)工学部に入学します。入学して間もなくこの学部は自分に向いていないと感じ、シカゴ大学への入学許可を得ました。その直後フィードラー青年は兵役にとられます。第2次世界大戦終了後、フィードラー青年は除隊し、シカゴ大学に復学します。兵役義務を果たした人間はシラバスを読んで試験を受けて合格すれば単位を取得できる恩典があることを知り、フィードラー青年はこれに挑戦し、結局学部課程の多くの単位取得に成功、学部課程にいっさい在籍しないまま、直接シカゴ大学大学院心理学専攻修士課程に入学することが出来ました。その頃フィードラー先生はジュディースと結婚しています。

もともとフィードラー先生は心理学、とくに産業組織心理学を勉強したいと考えていました。しかし当時シカゴ大学心理学部の多くのスタッフは臨床心理学か心理統計学でした。フィードラー先生は臨床心理学カール・ロジャーズ博士の指導により臨床心理学の勉強を始めるようになります。フィードラー先生は大学院院生当時、シカゴのVeterans Administration Hospital(帰還兵のための連邦政府立の病院)でカウンセリングの実習を受けました。指導に当たったのはコテコテの精神分析的立場の専門家でした。大学で研究指導を行っているのは非指示的カウンセリングの提唱者として著名なDr. Carl Rogers、このことはフィードラー先生を悩ませました。フィードラー先生は精神分析的カウンセリング、非指示的カウンセリング、そしてアドラー派カウンセリングの互いに異なるカウンセリングの学派のカウンセラーのカウンセリング過程を比較・分析することを博士論文研究テ

マとしました。3つの学派のカウンセラー（新米とベテラン）のカウンセリング過程の記録を分析しました。その結果、3つの学派間の相違はそれほど大きくなく、むしろ新米、ベテランの間の相違の方が大きいという衝撃的な結果を見出しました。これがフィードラー先生の博士論文です（学位取得は1949年）。その後フィードラー先生はカウンセラーとしての適性を判定するため、セマンティック・ディファレンシャル形式の対人関係測定尺度を工夫するに至ります。これが後にLPC（Least Preferred Coworker）尺度と呼ばれる尺度に発展していくのです。LPC尺度は上の第1図に示されていますし、また本稿の始めに近い部分で解説しています。

フィードラー先生は1951年にイリノイ大学心理学部集団効果性研究室においてリーダーシップ研究に本格的に着手し、それ以来、これまで述べてきた数多くの調査・実験を重ね、1969年にシアトルのワシントン大学心理学部組織研究室に移ってからも研究を継続し、リーダーシップ効果性の条件即応モデルおよび認知的資源理論を提唱し、関連分野に大きな影響を与えてこられたのです。フィードラー先生は科学的文献において最も頻繁に引用されてきた100人の心理学者の一人に選ばれています。

フィードラー先生がLPC指標の元となったASo指標を工夫して研究の上で初めて使用したのはFiedler (1951)、カウンセラーの対人認知傾向を測定しようとした試みでした。それからちょうど40年経過した1991年、カリフォルニアでフィードラー先生のリーダーシップ研究40周年を祝うシンポジウムが開催され、フィードラー先生ご自身を含む、おおぜいの研究者がそれぞれ研究報告を行い、リーダーシップ研究の展望を論じました。このシンポジウムで報告された諸研究はChemers & Ayman (1993)によって1冊の書物として刊行されました。

わたくしはこれまで長年にわたってフィードラー先生の指導を受けてきました。その詳細はこれまで述べてきたとおりです。フィードラー先生は1985年にシアトルのワシントン大学を退任後もしばらくは研究室に通い、研究を続けてこられました。やがてそれも終了、先生ご夫妻は長年住み慣れたご自宅を出て、シアトル郊外のマーサ・アイランドの高齢者用マンションに移り住んでおられます。2013年5月わたくしども夫婦はこのお住まいにフィードラー先生ご夫妻を訪ねることが出来ました。先生はこのとき、90歳、ご自宅のドア付近でステッキをつけて立っておられた先生は、わたくしを強くハグされました。先生は補聴器を使用されますが、会話はまったく通常どおり成立しました。ただ現役時代のあの凄さはもはや消え、いまや完全な好々爺になっておられました。もう研究に類するお話はまったく出でず、会話は他愛ない日常会話に終止しました。先生ご夫妻がお元気でられることを願うばかりです。

[参考文献]

- Cartwright, D. & Zander, A. (Eds.) 1953 *Group dynamics: Research and theory*. (1st ed.). New York: Harper & Row. (三隅二不二 [訳編] 1959 グループ・ダイナミクス<第1版>誠信書房)

- Cartwright, D. & Zander, A. (Eds.) 1960 *Group dynamics: Research and theory*. (2 nd. ed.) New York: Harper & Row. (三隅二不二・佐々木薫 [訳編] 1970-71 グループ・ダイナミックス [第2版] 1 & 2 誠信書房)
- Chemers, M. M. 1997 *An integrative theory of leadership*. Mathew, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates. (白樫三四郎<訳編> 1999 リーダーシップの統合理論 北大路出版)
- Chemers, M. M. & Ayman, R. (Eds.) 1993 *Leadership: Research and theory*. San Diego: Academic Press. (白樫三四郎<訳編> 1995 リーダーシップ理論と研究 黎明出版)
- Festinger, L. & Carlsmith, J. M. 1959 Cognitive consequences of forced compliance. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **58**, 203-210.
- Fiedler, F. E. 1951 A method of objective quantification of certain counter-transference attitudes. *Journal of Clinical Psychology*, **7**, 101-107.
- Fiedler, F. E. 1962 Leader attitudes, group climate, and group creativity. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **51**, 227-235.
- Fiedler, F. E. 1964 A contingency model of leadership effectiveness. *Advances in Experimental Social Psychology*, **1**, 149-190.
- Fiedler, F. E. 1967 *A theory of leadership effectiveness*. New York: McGraw Hill. (山田雄一<監訳> 1970 新しい管理者像の探究 産業能率短期大学出版部)
- Fiedler, F. E. 1971 Note on the methodology of Graen, Orris, and Alvares studies testing the contingency model. *Journal of Applied Psychology*, **55**, 202-204.
- Fiedler, F. E. 1972 Personality, motivational systems, and the behavior of high and low LPC persons. *Human Relations*, **25**, 391-412.
- Fiedler, F. E. 1977 A rejoinder to Schriesheim and Kerr's premature obituary of the contingency model. In J. G. Hunt & L. L. Larson (Eds.) *Leadership: The cutting edge*. Southern Illinois University Press.
- Fiedler, F. E. 1992 Life in a pretzel-shaped universe. In A. G. Bedeian (ed.) *Management laureats: A collection of autobiographical essays*. (pp. 301-333.). Greenwich, CT: JAI press.
- Fiedler, F. E. 1995 Cognitive resources and leadership performance. *Applied Psychology: An International Review*, **44**, 5-28.
- Fiedler, F. E. & Barron, N. M. 1967 The effect of leadership style and leadership behavior on group creativity under stress. Technical Report No. 25, University of Illinois, Group Effectiveness Research Laboratory.
- Fiedler, F. E., Chemers, M. M., & Mahar, L. 1976 *Improving leadership effectiveness: The Leader Match concept*. New York: John Wiley & Sons. (吉田哲子<訳> 1978 リーダー・マッチ理論によるリーダーシップ教科書 プレジデント社)
- Fiedler, F. E. & Garcia, J. E. 1987 *New approaches to effective leadership: Cognitive resources and organizational performance*. New York John Wiley & Sons.
- Fiedler, F. E., Murphy, S., & Frankls, G. U. 1992 Inaccurate reporting and inaccurate variables: A reply to Vecchio's (1990) examination of cognitive resource theory. *Journal of Applied Psychology*, **77**, 372-374.
- Fiedler, F. E. & Meuwese, W. A. T. 1963 Leader's contribution to task performance in cohesive and uncohesive groups. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **67**, 83-87. (白樫三四郎<訳>

- 1970 課題遂行に対するリーダーの貢献と集団凝集性 田中靖政<訳編>現代アメリカ社会心理学 日本評論社 pp.119-128.)
- マルティン・フロイト (著), 藤川芳朗 (訳) 2007 父フロイトとその時代 白水社
- Graen, G., Alvarez, K., Orris, J. B., Martella, S. A. 1970 Contingency model of leadership effectiveness: Antecedent and evidential results. *Psychological Bulletin*, **74**, 285-296.
- Graen, G., Orris, J. B., & Alvares, K. 1971 Contingency model of leadership effectiveness: Some experimental results. *Journal of Applied Psychology*, **55**, 196-201.
- Hosking, D. 1981 A critical evaluation of Fiedler's contingency hypothesis. In G. H. Stephanson J. J. H. Davis (Eds.) *Progress in Applied Social Psychology*, **1**, New York: John Wiley & Sons.
- Hooijberg, J. A. & Choi, J. 1999 From Austria to the United States and from evaluating therapists to developing cognitive resource theory: An interview with Fred Fiedler. *Leadership Quarterly*, **10**, 653-655.
- 三隅二不二・白樫三四郎 1964 組織体におけるリーダーシップ構造—機能に関する実験的研究 教育・社会心理学研究, **4**, 115-127.
- Misumi, J. & Shirakashi, S. 1966 An experimental study of the effects of supervisory behavior on productivity and moral in a hierarchical organization. *Human Relations*, **19**, 297-307.
- Raven, B. & Fench, J. R. P., Jr. 1958 Legitimate power, coercive power, and observability in social influence. *Sociometry*, **21**, 83-97.
- Rice, R. W. 1978 Construct validity of the least preferred coworker (LPC) scale. *Academy of Management Review*, **3**, 106-118.
- Sample, J. A. & Wilson, T. R. 1965 Leader behavior, group creativity, and rating of least preferred coworker. *Journal of Personality and Social Psychology*, **1**, 266-270.
- 白樫三四郎 1963 リーダーの対人認知と集団生産性 教育・社会心理学研究, **4**, 92-103.,
- 白樫三四郎 1968 小集団のリーダーシップ効果性に関する実験的研究: Contingency model の検討 教育・社会心理学研究, **8**, 123-141.
- Shirakashi, S. 1980 The interaction effects for behavior of Least Preferred Coworker (LPC) score and group-task situations: A reanalysis. 西南学院大学商学論集, **25(2)**, 102-112.
- 白樫三四郎 1992 リーダーシップ/ヒューマン・リレーションズ 黎明出版
- 白樫三四郎 1999 第24回国際応用心理学学会大会に参加して 甲子園大学紀要 (人間文化学部編), **3(C)**, 67-78.
- Shriesheim, S. & Kerr, S. 1977a Theories and measures of leadership: A critical appraisal of present and future directions. In J. G. Hunt & L. L. Larson (Eds.) *Leadership: The cutting edges*. Southern Illinois University Press.
- Shriesheim, S. & Kerr, S. 1977b R. I. P. LPC: A response to Fiedler. In J. G. Hunt & L. L. Larson (Eds.) *Leadership: The cutting edge*. Southern Illinois University Press.
- Strube, M. J. & Garcia, J. E. 1981 A meta-analytical investigation of Fiedler's Contingency Model of leadership effectiveness. *Psychological Bulletin*, **90**, 307-321.
- Vecchio, R. P. 1990 Theoretical and empirical examination of cognitive resource theory. *Journal of Applied Psychology*, **75**, 141-147.

フレッド・E・フィードラー先生は2017年6月8日に亡くられました。行年94。謹んでお悔やみ申し上げます。



フレッド・E・フィードラー博士（2017年6月8日没，94歳。写真は2013年5月25日，博士の自宅にて 白樫撮影）